

闇雲

『桂、桂、お湯が湧いたからおはいりよ』

自分から湯加減を見て來た母親のお靜は、濡れ手を前掛で拭き拭き座敷の方に大聲でいふ。

『はい』

返事は二間ばかり隔てゝ居るらしく、其まゝ暫くは音もしなかったが、やがて荷札の寒冷砂を、手の平でまるめまるめ、桂子が姿は現はれた。今し方着いたところで、十字緋の大島に、衿下の淡紅色のメレンスをぐるぐると巻いて、丈長い對の羽織を被つて居る。

『熱かなくって？』

水のぼろぼろ溢れて居る板の間を、爪立て爪立て歩いて來て、庭の棚の側に懸けてある紙屑籠に、手のものをぽんと投げ入れる。

『あゝ、今極いゝあんばいだよ』

棚から洗粉の瓶と、竿の手拭をとつてやり乍ら、

『熱けれあ水も汲まつてるしね』

臺所續きの、戸を一枚開けると、そこが直ぐ湯殿なのだ。肉付きのいゝ、ぽつてりとした體を、動けば溢るゝ風呂の湯に沈めて、桂子は暫く恍惚として居た。

格子の隙間から廊地の松の、枝と枝との間の雲の、灰色なのを眺めて居た目は、次第次第と落ちて、煤で黒くなつてゐる棚の隅に、蜜柑の皮の乾からびたのを見出した時、

『どうしたい？』

ひよっこりお靜の顔が現れる。

『いゝお湯よ！』

節つけて言つて思ひ出したやうに、一すくひほんのりと赤くなつた顔に浴びせかける。

『お母さんはまだ？』

目をあけて見るともう居ない。草履の音は忙しそうに勝手の方に行くらしい。桂子は獨りでにたりとした折りから、何やらしゅうつと煮えたつ音がして、はたはたと下女が驅けて來て蓋をとつたらしい様子、鍋の釣を向ふへかへす音がする。やがて鰹節をかきはじめる。鹽、味噌、醬油、油と殊更夕方は客の多い店のことゝて、忙しさはこゝにも響く下駄の音の庫續きの敷石に絶え間もない。折々甲走つたお園の聲も聞えて來る。魚焼くにほひのふんぷんする中を、桂子が湯上りの艶々した顔は、風呂場の薄闇を出て、間もなく夕餉

の膳に向った。

夜は勝手に下女まで集まって、土産ものゝ岡野の最中などを開きながら學校の話や寄宿舎の話、職員のうち美人が居ることや、美術學校よりも我職業學校の方が成績が宜いなどといふことを、今は餘程東京化した言葉で語って聞かせた。さては寫眞を持ち出して、友達の噂さや、其郷國くこくにの話、金持ちだのといふやうなことまで口にのぼる。下女はひたすらに感心して居る。お靜はそうかいそうかいと始終にこにこ、最後に持ち出した一行李の網物の雛形は、最もお靜を喜ばせた様だった。

つかれたらうからとうながされて、早加減はやかげんに床にはいった桂子は、夢もなくぐつすりと寝込んでしまった。ふと目を覺ましていつものやうに、友を起さうと傍に手を出すと、思ひもかけず寝て居るのは母親だ。故郷に居る心に直ぐかへつたが、折角あたゝまった床をさますも辛らく、つい小半時はじつとして居た。宵其まゝの室は六疊に昔ながらの籠行燈かごあんどんの灯影はおぼろ、床の間の軸の墨繪が、たゞ黒く見える。やがてそつと床を抜け出た。用を足して何氣なく室の障子をひきあけると、いつの間に目を覺ましたか、お靜はすばりすばりと煙草を吸って居る。

『氷が張つてよお母さん、厚あつういのが……』

『そうだらうともね、随分冷える晩だから』

すぽりともぐり込んで枕を引きよせ、横になつてつくづくと煙にけぶる小さな丸鬚を眺めてみる。

『お母さん随分白髪が繁殖ふえてね』と甘へ心に、

『そうかい……そうだらうとも、大がいな苦勞ぢやないからねえ』

お靜は案外にしんみりとなる。

思ひ待うけて居たことで、待つて居なかつたものが急に來たので、桂子はつぶりかけた目をぱちりと開いて母の顔を見た。が、其まゝ寒さに縮まるやうに蒲團をかぶってしまった。

明るあく日の午後、桂子は倉の二階に寝ころんで、お靜の持つて來てくれた百目柿を味はひながら、いろいろな昔の雑誌などをひきづり出して讀んで居た。出かゝった欠伸あくびをかみ殺して、盆の上にまた手を出しかけた時、勝手に何やら大聲がする。母と姉の衝突らしいと思つて居ると、やがて間もなくお靜が上つて來た。

『私の云ふことなんか、てんでもう茶ちやにしてる！』とぶりぶりしながら、物問ひ顔の桂子が傍に座つて、それからものゝ一時間もいろいろな愚痴を繰り返して居た。

桂子はそれを無言^{だま}つて聞いて居た。

十九年前の年三十三で此家に嫁^{よめ}て、生まれて間もない桂子を育てたのは此お静、桂子がお園や志一^{しいち}の眞^{まこと}の兄弟といふことはつひ去年の父が死んだ折にふとしたことから知つて、本氣にしなかつた位、桂子は此家の後妻の、お静の眞^{まこと}の娘と信じて居た。それ知つてからとても格別我儘の言ひ憎いことはないが……眞實^{ほんじつ}の姉妹^{けうだい}と知つて見れば、今までは悪くばかりいつて居たすべての行爲が、或は此方の邪推^{じえい}だったかとも思はれる。

父が死んでからは、勝氣なお園が一切を切つて廻して權威は婿^{むこ}の悟三郎^{ごさぶろう}よりも高く、今までは定限のあつた桂子の学費が増して来る。時折は牛乳代などと手紙にふうじ込まれて来ることもある。矢張り自分を眞^{まこと}の妹と思ふ空^{から}だ。と昨夜床の中で考へたことが、今また走馬燈のやうに頭にうかんで来て、ものを言ひたくもなかつたし、何といふことも出来なかつたのだ。

けれども老年^{としより}は、愚痴を溢すが慰藉^{なぐさめ}である。だから愚痴を聞いてくれる者は可愛い。

其頃はまだ壯健^{たうけん}だった祖母の秘蔵子で、早や物心ついて居た姉娘のお園が、繼母としてあつかひ來^{きた}つた中に、心から自分を母と信じて、事によつてはお園の告げ口もしたこともある桂子を、お静は今も我ものと思つて居る。

それで二人にさへなればすぐに愚痴がはじまつてくる。

家内^{かない}の者が皆して自分を邪魔にすることや、志一^{しいち}が若いくせに放蕩^{ほうたう}なこと、そのとつばしりがいつも自分にはねて来ること、一旦つぶれた婿の家が此頃よくなつたことまで話して、立つ瀬がないとしほれて来る。桂子は初めのうちこそ聞いて居たが、何かしら用をこしらへて直ぐ立つてしまふやうになつた。

お園は或る日桂子にこんなことを話してきかせた。

お静がもと嫁^{よめ}づいた家に残して來た一人の息子が此前尋ねて來て、人をもつてお静を呼び出し、金をせびつた様子だといふこと。そして大分^{だいぶ}くれてやつたらしいと付け加へた。

『それはみんなお母さんの邪推よ、何も姉さんだつて……』

桂子は今は凭^こんなことをいふやうになつた。

するとお静は、

『お前はそうお言ひだけれども……』と躍起になつて辯解する。

それも二三日、お静がひとり煙草をふかしてゐるところに桂子が入つても、お互に何も言はないやうなことが多くなつた。

休暇^{やすみ}がまだ十日もあるといふに、桂子はある日俄に歸京^{かへ}ると言ひ出した。此さきの驛に

友達が待ち合せて居るから一所に歸京いっしょらないかと言つて來たので。

お園は頻りに止めたけれども、返事を出してしまつたからとて桂子は其夜汽車でかへることになった。お静は格別止めもしなかつた。いろいろと土産物も揃へてくれ、例の通り少なからぬ小使いもくれた。車から降りて、切符を買つて、間もなく着いた列車に乗るまで、桂子はたゞ一ことを考へて居た。いつものやうに残り惜しさうでなかつた母の顔のものの足りなさで。

夜のこととて乗客は少なく、それも大方睡ねむつて居る。シヨールにうづめた首を窓の外に出して見ると、下駄の齒のもつてきた雪の残された場内に、電燈の數々が靜かに靜かに眠つて居る。

『また降るぜ！』

隣の車室の窓から首を出した一人が凭かう叫んだ。

冷たい風がさつと吹き込んで、列車はガタンと動き出した。

底本…「水野仙子全集」第一卷

初出…「文章世界」明治四十年十一月

テキスト入力…小林 徹

公開…平成二十九年八月二十七日

修正…令和元年七月一日

リンク…[水野仙子ホームページ](#)